



| | |
|--------------|--|
| Title | VIAGGIO DI HIERONIMO DA SANTO Stephano Genouefe 及びHo liuro de Nycolao Venetoに関する研究ノート |
| Author(s) | 林田, 雅至 |
| Citation | |
| Version Type | A0 |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/94535 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

7. テキスト：Ho liuro de Nycolao Veneto：翻訳：

第 78 葉[ページ]：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶まことに雄弁なる演説家ポッジオ・フロレンティン*(フィレンツェ出身)の筆になるニコラウ・ヴェネトの旅行記がここに始まる。ポルトガルならびにアルガルヴェを統べ治める、泰然自若にして無敗を誇る国王陛下マヌエル 1 世に献呈され、いと優れたる王妃ドナ・レオノールの従者ドイツ人ヴァレンティン・フェルナンデスによりラテン語からポルトガル語に翻訳され、この後、序文が続くものである。

*ポッジオ・ブラッチオーニ(1380-1459)：イタリアルネサンス初期の人文学者、文献学開拓者；教皇秘書官(公文書[勅書]執筆)

序文

他の動物よりもよりよくありたいと望む万人はこの上なき努力を重ねて、自然に本能や食欲の赴くままに、創造された動物たちのように沈黙のうちに一生を過ごすことがなきように働かなければならぬ。つまり、すべての我らの力の源は魂と肉体に宿る。我々は、命ずるために魂を有し、奉仕し、従うために肉体を備えている。

我々は、神を第一の大義とし、一方に参画し、また、動物に共通する他方に参画し、才能の様々な力を駆使して、栄光を追求するのである。そして、我々の有する人生は短く、我々の記憶を可能な限り長く留めておくことは、私には肉体のあらゆる力を以ってするよりもより良いと思っている。何となれば、富と美の栄光は儂くも壊れやすく、徳のみが高貴で永遠に尊重すべきと考えるからである。かくして、人々が働き、航海し、構築するものはすべてあらゆる徳に従うものである。しかし、生まれたる多くの者は思慮分別を知らず、腹を満たして、睡魔に身を任せている。巡礼者(放浪者)のように、一生を送り、自然に反して、快楽を求める肉体と嫌悪する魂が彼らに与えられたが、私は彼らの生と死を等しき一人の者として尊重する。個々人の人生については話さないからである。私には魂を糧にして人生を送る者こそが、何かに没頭して、あるいは何かの優れた技量によって、あるいは栄えある偉業によって令名を馳せるのである。

第 78 葉[ページ]裏面：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

それ故に、我々の人生は沈黙して送るべきでないことを確認して、大いなる肉体的な働きをしては、休息をとりながら、私は、人生の糧を得、まことに高貴なる印刷技術の名誉に浴したのである。私はその技術修得に専念し、このニコラオ・ヴェネトの旅行記をラテン語からポルトガル語に翻訳したいと思った。まことに雄弁なる演説家フィレンツェ出身のポッジオの筆になり、彼は、教皇エウジェニオ 4 世の秘書官である。ニコラオはアジアにおいて海路、陸路を通して多くの艱難辛苦を乗り越えて、キリスト教を棄て、25 年後、ヴェネツィアに帰還して、神聖なる教皇にまことに深刻な罪の恩赦を請い、教皇は彼に改悛させ、その秘書官ポッジオにかのオリエントの諸地域で見聞したることをできる限り思い出させ、す

すべての真実を明かすことを宣誓させたのである。また、教皇は禁欲的賢者の教えに従い、道徳論のすべての作品は公益共有に資するものなければならぬことも望まれた。それを以って執筆作業は順調に始まった。多くの者にとって素晴らしいこと、未知のこと、殆ど知られていないことがその一端をなし、ニコラオが巡った海上の道、諸地域や王国について、まことに秀でた雄弁術を以って執筆した内容を私は翻訳したのである。嘘偽りなく、彼によって脚色された摩訶不思議さは一切なく、分別ある美德や真実を知ることが追求する人間として、ニコラオは見聞し、触れた確かなものを書き留めている。翻訳して、心動かされ、『マルコ・ポーロの見聞録』に今回の旅行記を加えることに決めたのは、これによって、泰然自若たる国王陛下にお仕えし、陛下の臣下のものたちに以下のことを知らしめ、また忠告を与えることを望むからである。インドにキリスト教徒が存在し、モウロ人や偶像崇拜者たちが存在する地域の危険であること、大いなる利益や富の数々、即ち、宝石、馥郁たる香辛料、金銀、それぞれが生育・産出する場所や地域。そして、国王陛下が、まことに長期にわたり、労苦を重ねる旅路において、これらを探し求めることを厳命する者たちが幾ばくかの慰安と快楽を享受するためでもある。さらにこの旅行記が、カリカット及びコーチンなど同様に、我々に既に発見されたインドの幾つかの都市についてより詳細に語られているからである。加えて、グレゴリオ教皇(c.1210-76;在位：1271-76)時代にオリエント諸地域を見聞した『マルコ・ポーロ(c.1254-1324)旅行記』(1271-95)の証明になるからである。当時は大カアン(クビライ・カアン：1215-94)領土の北側の地域に向かった。

第 79 葉[ページ]：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

このニコラオはその後、エウジェニオ 4 世(1383-1447)[第 207 代教皇(在位：1431-1447)]の時代に、南部の地域へ向かい、上記の領土を発見し、現在の翻訳の事由の地域である。さらに、ラテン語からポルトガル語に翻訳するに際して、非常に深刻な問題であったことは、婉曲表現や回りくどい言い方で話すのに都合のよい原語による様々な用語の音と同様に多くの語彙の真の意味を、ある言語から他の言語へ、翻訳する時に生じる致し方なく必要となる数々の欠陥齟齬が生じたことであった。まことに雄弁なる演説のスタイルについて、ラテン語の美飾音を十分に生かすために、言葉に増減を加えるのである。ラテン語を話すことも、知ることもない私にとって、この翻訳で必要であったのは、作者があらかじめ想像していたある言葉について、それらの言葉を棄て、また加えるということであった。結果的に、すべてにおいて、文章から何も加えず、また何も削ることもなかった。多くの銜学的な言葉を以って、作品の翻訳がなされることを望む者があるものの、その文体があまりに高尚で、含意されるものに文彩や婉曲表現があり、一方で、多くの者から批判を浴びるのである。一般の素朴な読者は、それが妨げとなって、文章の真実を知ることが出来ないからである。飾らない文体の文章がある一方で、多々潤色を含む作品は常に批判的となる。それ故に、批判には開かれた扉があると私は見ている。確かに、何人も言い訳の出来ないことを免れようと思わずに、赴くままに筆を遊ばせることはないだろう。門が閉ざされた場合であっても、諦め

ず執筆を続け、作者がその作品を上梓し、その刊本を献呈する人物が慣例的に顕示する讃辞は脇に置くことにする。『マルコ・ポーロ見聞録』の冒頭に私は国王陛下のために発見した新天地に関して日々我々が目にする素晴らしいことの数々について少しばかり書いたとは言え、そこで、私が筆の勢いに任せる讃辞は雄弁さを失うこともなく、筆勢は讃辞を控えようとするものではない。それらの讃辞が非常に明解で名にし負うもので、讃辞を膨らませよとの声が多く寄せられても、讃辞を中央に据えることはなく、価値ある強勢(アクセント)を加えることもないだろう。それ故に、それを最良と讃える他の者たちの声に耳を傾けることをよしとはするが、かと言って、その弦が切れてしまうほどにかき鳴らすものではない。国王陛下がこのちっぽけで荒っぽい翻訳を暖かく受け入れて下されば幸いであり、朗らかで落ち着いた表情を以って、これをご覧になり、カエサル* の名言*を思い出していただきたい。自由な手で非常に大きなものを受け入れるより、小さきものを喜んで受け入れる方が王子にとっては、少なからず徳行を示すことになりましょう。

*カエサル名言：文章は、用いる言葉の選択で決まる(『ガリア戦記』)：

<https://1000ya.isis.ne.jp/0365.html>

第 79 葉[ページ]裏面：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

作品が、高貴なる国王陛下に、知っていただき、教養としていただくために相応しく称賛に値するほど評判の高いものではないことを知るに至ったのである。然るに、極めて慎重で、まことに善意に満ちた王侯貴族から有難いお墨付きを得、正しく、いと敬虔なる神父がまことに愛情を注ぐ子どもたちにするように、民人や学識・教養にさほど精通しない人々に知恵を分かち与えようとするためである。

¶ニコラオ・ヴェネトが旅した東洋の地に関して、フィレンツェ出身のポッジオが執筆した旅行記のプロローグがここに始まる。

これを読む人の心に、作品に含まれる多くの多種多様な事柄故に、陽気で楽しい歓喜をもたらすような旅行記として、そうした目的を以って、執筆する慣例の手法から少し距離を置くとしても、それは意図したものであると私は信ずるものである。

つまり、運命の力を小さく見積もるべきではない。運命の力こそが一人の人間をして、幾千里の海路と陸路を経て心揺さぶられた世界の最果ての地から、25年の時空間を通して、健康でまた無事にイタリアに帰還したのである。数多の事柄がインドについて、古代の作家たちによるのと同様に、共通の評判によって、語られるものの、見たままの経験に基づき、多くの事柄が真実よりも寓話(御伽草子)の世界に近いと人々を魅了するのである。確かにニコラオ・ヴェネトはインドの辺境の地まで深く入り込んだからである。当時フィレンツェに玉座を構えておられた教皇エウジェニオ[4世(1383-1447)]に自らの罪の数々の恩赦を請うために拝謁を賜っている。帰還において、彼はインドを出立し、紅海を通過して、エジプト国境

に到着したが、死の恐怖を眼前にして、彼に帰属していた物だけでなく、帯同していた妻と子供たちを逃がすためでもあり、キリスト教を棄教することを強制されていたからである。そして私は、その男から多くの事柄を聴いてみたいと思い、確かに知るに値することを聴いたのである。これを教養ある人物たちとともにに行い、また拙宅にて熱心に彼に質問しながら、私には、記録に留めるその多くは、永遠の記憶に留め置くに相応しく称賛に値するものと思われた。そうした、それほど遠隔地の人々のところにまで至る旅路のこと、インドの人々及びその種々様々な風俗習慣のこと、また動物、樹木のこと、同様にそれぞれが繁茂・生育する地域の香辛料のこと、つまり、彼が真面目に接触したことに関してである。

第 80 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

彼はそのような事柄を偽ろうとしているように思えず、全くの現実味を以って、その事柄を知っていると思われた。この男は余りに遙か遠方へ行ったので、確かに我々は、過去の人物たちの誰かが彼が到着したところまで到達し得たかを読んだことがないのである。かの地で彼はガンジス川を渡り、タプロバーナ島(セイロン島)の遙か向こうにまで行ったのである。かつてそれらの地域で 2 人の人物が救出された。即ち、アレシヤンドレ艦隊キャプテン(艦長)及びもう一人は古代ローマ市民であり、2 人は皇帝ティベリウス(ユリウス・カエサル：42BC-AD37)の時代にそうした地域に海上の幸運によって連れて行かれたのである。そして、我々の誰か他の者がそこに到達したことを示す記録はないのである。

ここに序文は終わり、本編が続く。

この若者、即ちニコラオ・デ・ヴェネザは、最初にアラビア語を学んだシリア・ダマスコ(ダマスカス)市を出生した。一般民衆はキャラバンと呼ぶ 600 名に及ぶ大量の商人の会社にその商品を加えて、向かったのである。彼らとともに、ペトラーと命名される砂漠地帯アラビアを通ったその後、カルデア(メソポタミア南東部に広がる沼沢地域の歴史的呼称)に向かい、ユーフラテス川まで辿り着いた。¶ 上記のこれらの地域の中央にある砂漠を出ると、素晴らしいもの、流星群が見えると言われている。

真夜中頃、耳を劈くような大音声が響き渡り、注意を払い、アラビア盗賊が強奪に襲来するのではと大いに恐れ、危険が迫りくると感知して、全員目を覚まして、起き上がった。彼らは大群衆が沈黙して押し寄せるのを目撃して、テントまで来たが、誰にも危害を加えることなく、別の時に見た時に比べても、少なからぬ人数を見て、あの砂漠の一角を駆け巡る常習犯の悪魔であると言われており、そうであると確信した。¶ ユーフラテス川に、まことに高貴で古の都市バビロニア(現代のイラク南部、ティグリス川とユーフラテス川下流の沖積平野一帯を指す歴史地理的領域)の一部が横たわっている。周囲は約 14 万パッソス(約 21 km)[古代ローマの長さの単位：約 1.48m]でバビロニアの住民は新たにバルダック(バクダッド：イラクの首都、イスラム世界の主要都市の一つ)と呼んでいる。都市の中心部をユーフラテス川が流れ、その流れの上に、14 に及ぶ強固な弓形橋梁があり、河川の一方から他方

を跨いで、都市を一つに結んでいる。都市にはなお古代都市の廃墟や歴史的遺物がある。

第 80 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

都市の山間部には、非常に堅固で美麗極める王宮要塞がある。都市の国王は強大な権力者である。¶ 宮殿の前方に、20 日間河川を航行し、彼は多数のまことに高貴な人家屋敷の島々を見たのである。¶ 8 日間の陸路を経て、バルセラ(現バスラ：イラク南東、シャットウルアラブ川右岸の港湾都市)と命名される都市に到着した。

¶そこから 4 日の果てに、ペルシャ湾に達し、我らが大西洋の流儀になる潮汐(潮の満ち引き)がある。¶ 湾を通過して 5 日間航行し、カルコム(現ホルムズ)の港に入った。その後、ホルムズ(ホルムズ：ペルシャ湾で 10 世紀～17 世紀に存在したホルムズ王国の港湾都市)に着いた。ペルシャ湾に浮かぶ小島で、陸地の部分は周囲 1 万 2 千パッソ(約 12km)である。¶ そこからは、インドに向かってペルシャ湾の外海で、インド洋になり、100 マイル(185.2 km)でペルシャのまことに高貴な港カラバティア(現カラチ：アラビア海沿岸のパキスタン南部最大の都市)に到着したのである。その港では大きな交易があり、そこに暫く滞在し、ペルシャ人の言語を学んだ。その言語は後に非常に助かることになった。ところで、彼はその巡歴の最中、四六時中土地の服装を着用した。カラチで、ペルシャの商人仲間とモウロ人と一隻の船と輸送契約を結んだが、まず信頼のおける協働組織同盟(コンパニア)誓約を彼らの間で交わした。¶かくして、協働組織同盟の下に航行し、丸 1 か月かけて、カンバイア(現カンバート：インド・グジャラート州、アーナンド県の都市)と呼ばれるまことに高貴な都市に到着した。インダス川の入り口に次いで第 2 の入り江であった。その地域には紅縞瑪瑙(めのう)と呼ばれる宝石が産出する。そこでは、夫とともに妻が火葬される。亡骸の職位の高下によって一人かそれ以上の妻が伴葬される。生前夫から寵愛を受けた妻は、夫の首筋から伸びる片腕を抱いて、妻は夫とともに横臥して茶毘に附される。そして他の妻たちは火が焚かれ、かくして同様に燃え盛る火に身を投げるのである。これらすべての儀式については、社会階層の下部に至るまで広く挙行される。

¶さらに先に進んで、20 日間で海岸線に横たわる 2 都市に到着した：パカムリア(バルクール)とデリン(ヘリー)。その二つの地域には生姜が生育し、土地の言語ではベレディ、ジェベリ、エリと呼ばれている。2 コヴァード(132cm)の高さの木の根で、蘆の根のように非常に硬い皮層を有している。実で覆われ、そこから生姜が採れる。生姜は石灰と混ぜ合わせ、3 日間天日干しすれば、乾燥する。

参考資料：パカムリアなど：

<https://eemaata.com/em/library/a-forgotten-empire/103.html/9>

<https://byjus.com/free-ias-prep/niccolo-dei-conti-1395-1469/>

(上記 2 URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

第 81 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶その後、そこから 300 マイル(約 483 km)の海上長旅で、ビジェネゲル(ヴィジャヤナガル)という大都市にきた。周囲は 60 マイル(約 97 km)に達し、谷合の高い山々に柵が設置され、山々に向かう城壁のその一部から都市を俯瞰すると、包囲はより大きく見え、眺望が開け、見栄えがするのである。都市では 9 万人の男性が武装している。この都市の住民は望むだけの女性と結婚でき、彼女らは死亡した夫と荼毘に附される。¶彼らの王は非常に強大な権力を持ち、他の王を遥かに凌ぐ力を有している。この王は 1 万 2 千人まで正妻を娶ることができ、その内、4 千人の妻は、王本人が出向きたいところに行脚し、厨房務めに専念するのみである。他の多くの者は彼の後方から十分に準備された馬に乗って、名誉を以って随行し、さらに残りの者は寝床あるいは御輿で連れて来られ、そのうち 2 千人は彼が妻として受け入れると言われるが、他界した主君の王が燃え盛る炎の中に、彼女らは自らの意志で彼の骸とともに火の中に身を投じる。かくして彼女らは彼とともに荼毘に附される。これは彼女らにとって大いなる名誉なことである。

¶ペラゴンガ市は同王の臣下の統治下にある。貴族と同格である。周囲は、約 3 万パッソ(約 44.4km)、ビジェネゲル(ヴィジャヤナガル)から陸路で 8 日間離れている。

Theatrum orbis terrarum : Pelagonga :

<https://archive.org/details/theatrumorbister00orte/page/n41/mode/2up?q=pelagonga>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

Lexicon Universale,1698:

<http://mateo.uni->

mannheim.de/camenaref/hofmannind/Hofmann_lexicon_nomenclator.html

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

¶そこから、その後、陸路で出立し、20 日間の旅程で海岸線の都市プディセタニアに到着した。その途上、非常に美しい 2 都市、即ち、オデシリアとセンドルギシアを後にしたが、そこには赤白檀が生育している。

¶そこから先に件のニコラオは進み、千の隣国の都市マレプール(現マイラポール：南インドの東側コロマンデル海岸沿いの、ベンガル湾に面するタミル・ナードウシュ州都チェンナイの主要港)へ行った。そこはインダス川を越えた海岸線に位置し、そこには使徒聖トメ(トマス)の聖体が、名誉なことに、大きく極めて美しい教会に埋葬されている。その住民はネストリウス派の信者である。この宗派は、丁度我々の間のユダヤ人と同様に、インド全土に普及している。そして、これらの全州はマラバルと呼ばれる。¶これらの都市を越えると、もう一つの都市カイラ

第 81 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

であるが、そこでは小粒真珠が採取される。¶また、無果実の樹木が生育し、葉は長さ 6 コヴァード(396cm)、幅も同程度。非常に薄く、繊細であるので、集めたものを男が片手の拳で持って行くことが出来る。それらの葉は、その地域で筆記用の紙として使用される。また、

雨季には濡れないように頭に載せるのである。¶3~4人の旅人はそれらのうちの1枚を以って、広げて翳し、ともに濡れることはない。

¶この活気ある入り江の中央に、まことに高貴なセイロン島があり、円形の周囲は3千マイル(約4,830 km)に及ぶ。そこではルビー、サファイア、ザクロ石、猫目石(金緑石：キャッツアイ)と呼ばれる宝石が採掘される。

¶島にはシナモン(肉桂)が大量に生育する。その木は柳に似ている。側面から芳香が溢れることなく、枝が長く伸びないことを除くとより太いのである。葉はすべて、より大きいことを除いて、月桂樹に似ている。枝の外皮は最良で、これらの中でも最も繊細で、幹や茎は最も太いが、味わいは少なく、果実はシナモンの野生化したものに似ている。そこからたっぷりと芳香ある油が、軟膏用のオイルとして採れる。インド人は軟膏用のオイルとして多用する。残りの木は外皮が剥がされ、燃やされる。¶その他、この島には、小さな湖があり、島の中央に真の都市があり、周囲は3マイル(約5 km)ある。すべての他の階級から知恵者と看做されるブラマノ(バラモン：カースト制度・最高位の司祭・僧侶階級の総称)と呼ばれる階級に属する数名の人間のものでなければ、統治もされず、第三者の支配もない。ブラマノは哲学によって全生涯にわたって研究を続けている。彼らは占星術に長け、全き正しい生涯を送る。

¶その後、シャムテラと呼ばれる大都市にも行った。そこはタプロバーナ島(現・スリランカ)の非常に高貴な港である。島は周囲が6マイル(正：2千マイル≒約3,219 km[林田])ある。彼はそこに1年滞在した。

¶そしてその後、順風に恵まれ、20日間航行し、右手にアンダマニア(アンダマン諸)島を後にする。この島は金の島という意味である。島は周囲が80万パッソ(約1,184 km)である。

第82葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶島民は食人種(アントロポファジイティ；anthropophagitis)で、人肉を食べるのでこのように命名されている。

¶この島には誰も航海しない。大嵐の力が島へ航行を強いる者たちを除いては。ただ、彼らが島に到着すると、すぐに野蛮で残忍なあの島民の術中に嵌まり、俄かに食べられるために、奪い捕えられ、切り刻まれるのである。¶彼はタプロバーナ島に比べて、その周囲が10万パッソの16倍(約2,368 km)あると断言する。¶この島の男たちは非常に残忍で、素行が荒っぽい。彼らは非常に大きな耳を持ち、男も女も等しく全員そうである。両耳には宝石で縁取りされた金糸の耳飾りがあった。¶服装は、亜麻織布か絹織布で膝頭までの長さがある。¶男は多数の妻を娶る。その邸宅は、灼熱の太陽光を避け、守るために、平屋である。¶その住民はすべて偶像崇拝者である。¶この島では、他よりも大きい胡椒が生育し、さらに長胡椒、そして樟脳も。加えて、大量の金がある。¶胡椒が生育する木はキツタに似ている。果実は緑色で、ビャクシン(柏楨属、ヒノキ科針葉樹属)の球果のようである。胡椒の果実の上に少量の灰を振り掛けて、天日干しで乾燥させる。¶この島には緑色の果実があり、ドウリアノ

(ドリアン：麝香の香り)と呼ばれる。スイカの大きさで、中にはオレンジのような5つの果物が入っており、少し長く、凍ったバターのような多様な風味がある。¶パテックと呼ぶ島の一部の地域に、人の肉を食らう食人種が住み、絶え間なく近隣種族と闘っている。¶彼らは財宝として人の頭蓋骨を有している。敵を捕まえた後、首を撥ねる。人肉を食べた後、頭蓋骨を保存する。これらを貨幣として使う。何かを購入しなければならない時、その価値によって、一つか二つの頭蓋骨で売買する。

第 82 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

自宅に多くの頭蓋骨を所有するという理由で、その者はより裕福と看做される。

¶タプロバーナ島の後、大嵐の 27 日間を経て、テナセリム市(現タニンダーリ地方域)に到着したが、市は同名テナセリム川の河口にある。その地域は大量の象が棲息し、たくさんのブラジルスオウ(木材から紅色染料の抽出)が生育する。

¶彼は海路及び陸路で、長い旅程を進んだ後、ガンジス(ガンジ)川の河口に辿り着いた。川を經由して、上流へ 15 日間で一都市、まことに高貴で、これほどまでに豊かと思えるセルノウエンに達した。その川の大きさは余りに広大で、川の真ん中を航行しながら、一方の岸も、もう一方の岸も、その陸地を見ることが出来ない。彼が言うには、いくつかの場所で、川幅が 15 マイル(約 24 km)もある、と。¶この川の河岸にはサトウキビが生育し、長く、非常に太い茎で、一人の男が抱えても、両指先が届かず、彼らはそのサトウキビから漁船のような小舟を作る。その理由は、その堅い皮は、厚手の椰子のようで、木の瘤と瘤の間は成人男性の身長ほどあり、かくして、この川で航行するための小艇を造船することができるからである。この河川は鱈を育み、我々の知るところの及ばぬ多種多様な魚を育てている。この川のあちこちに、都市、非常に美しい未開の地や青々とした菜園が点在する。そこには、イチジクに似て、蜂蜜よりも甘いムーザと命名される果物があるが、我々の間では、インドの胡桃と呼んでいる。さらに、多種多様な果物が生育している。

Manmohan Chakravarti, *Bengal District Gazetteers-howrah*, 1909, p.43(55) :

<https://archive.org/details/in.ernet.dli.2015.33074/page/n55/mode/1up?q=Cernouem&view=theater>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

Ivar Hallberg, *L'extreme Orient dans la litterature et la cartographie de l'eccident des 13e, 14e et 15e Siecles*, 1907, p.130-31(142-43) :

<https://archive.org/details/in.gov.ignca.2652/page/n143/mode/1up?q=Cernouem&view=theater>

<https://www.geni.com/people/Ivar-Hallberg/6000000022492029866>

(上記 2URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

¶彼はこの都市からガンジス川を上流に遡り、3 か月を経て、然しながら、まことに美しい 4 都市を背後に残して、マラアジアと呼ばれる非常に強大な都市に到着した。そこには大量の金銀、小粒真珠、宝石が産出し、キダチアロエ(木立蘆薈)が生育している。

¶この都市から出発し、聳え立つ山脈を越え、東に向かって、柘榴石を求めて進み、12 日後、

再びセルノウエンに戻った。その後、プディフェタニアに着き、そこから海路で、丸1か月かけてラシャ河口に到着した。その川を上流に進み、6日後、上流域に横たわる川と同名の大都市に到着した。

第83葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶この都市を出発し、大山脈、大砂漠を経由して、進んだ。17日後草原に到着した。そこを15日間歩いて、ガンジス川よりも大きな河川で、河川は、その住民によってアヴァと呼ばれている。¶川を上流に上ること1か月、他の都市と比べて、最も高貴で豊かな都市はアヴァである。周囲は1万5千パツソ(約22.2 km)に及ぶ。¶この都市には居酒屋だけでも多数軒を連ねる。これからは、可笑しみに満ち、歓喜に溢れる、笑止千万に値するものだけを書き留めることにする。この都市の人々は、生き生きとし、歓喜に満ち溢れている。この都市では女性だけが金銀銅の小さなナツツのような鈴を販売し、結婚を望む男性はそうした女性のもとに行くのである。他のやり方では、男性は結婚において拒否される。この鈴が売買されて、恥ずかし気もなく、それらの女性たちの臀部の狭間にある恥部の皮膚が露わにされて、男性陰茎の所在を感じ取るために、その内側に1ダース以上の鈴が詰め込まれる。その後、その恥部の皮膚は復元されて、数日後、健康な状態に回復する。これを行うのは女性の意志を実現するためである。その理由は、彼女たちが発言している通り、彼女らは、あの瘤が膨れ上がり、いっぱいになり、男性陰茎により大いなる恍惚感をもたらしてくれるからである。そして男性の多くが町を歩き、跪いて、あの鈴を鳴り響かせ、それらが鳴るのが聞こえるのである。このことについて、このニコラウはあの女性たちから何度もそれをするを求められたが、彼女たちは、彼のものがあまりに小さく、彼を嘲笑していたのである。ただ、彼は自らの痛みのために、相手に蕩(とろ)けるような快樂に誘うことを望まなかったのである。

Pudifetania(Madras Chennai):

CONTI, NICCOLO DEI (c. 1395-1469) in *Library of Congress Cataloging-in-Publication Data Literature of travel and exploration : an encyclopedia* / Jennifer Speake, editor :

<https://kobra.uni->

kassel.de/bitstream/handle/123456789/2008062622238/BaumgaertnerContiNiccolo.pdf;jsessionid=4336F33B2BF17E7EE1E45781068D1676?sequence=1

https://en.banglapedia.org/index.php/Conti,_Nicolo_de

(上記2URL 最終閲覧日付：2024年2月19日)

Racha:

<https://www.theracha.com/>

(URL 最終閲覧日付：2024年2月19日)

ベンガル古地図：

<https://mappingbengal.com/sylhet-frontier-city>

<https://quod.lib.umich.edu/e/eebo/A71305.0001.001/1:5?rgn=div1;view=fulltext>

(上記 2URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

cascavel:鈴, 着物(装束) :

<https://joao-roiz.jp/LGR/search>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

auelaã:ヘーゼルナッツ :

<https://joao-roiz.jp/LGR/search>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

ブータンの男根崇拜 :

<https://www.afpbb.com/articles/-/3213317>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

¶この都市を住民はマシン(Maçyn)と呼び、象がたくさんいる。それ故に、国王は1万頭を飼育し、戦争に活用する。象の背中に砦を建造し、8人か10人の男性が乗り込み、投げ槍(短)弓、大弓を以って戦うのである。¶象が動員される戦法が次の如く口述されたが、それに関して多くの者がプリニウス(西暦 23-79 年；古代ローマの博物学者)に同意するようである。野生の象は、象が愛情を感じる時、おとなしく、その本能を抱く雌象を連れ出して、壁で囲われたそのために作られた草を食む場所へ連れて行く。その場所には二つの大きな扉があって、一つは入場の扉で、もう一つは退場の扉になる。雄象は、雌象がその場所にいると感じた時、前者の扉から中に入り、雌象が雄象を見ると直ぐに

第 83 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

もう一方の扉から逃げ始め、外へ出る。雌象が退場すると直ぐに両方の扉は施錠され、そこには非常に太く強靱な綱を持った千人以上の男子が動員され、整列され、待機している。直ぐに壁の上から入り、また他の者は壁の穴を通して、入り、雄象を掴まえるために綱と投げ縄を用意している。すべて準備万端が整った時、彼らの一人が入場し、その雄象に向かってそうした綱が準備されていることを示すのである。雄象はその男に対抗して、激しく彼を掴まえて殺そうと彼の背後を疾駆、突進し、件の綱と縄の中に入る。他の者たちはそれを見て、追いかけて、即座に綱と縄を投げて、雄象を捕獲し、まんまと強く縛り上げ、後ろ両足を縛る。一本の杭かマストに縛り付け、地面深くに押し込んでしまう。そこで、動物焼印を押し付け、3~4 日間吞まず食わずでそのままにして、空腹の状態にする。その数日間、毎日少量の牧草を与え、飼い馴らすのである。その後、大人しい他の象に交じって、その雄象を掴まえ、毎日町中を練り歩かせ、町の端から端まで連れ回す。かくして、5日経過すると、他の象と同様に大人しく手懐けられるのである。¶プリニウスはさらに言う：他の土地では、柵囲いした小さな谷間に無理やり、象をそこへ行かせ、雌象から離し、雄象だけをそこに留め、餌を与えず、3日経過すると、そこから出して、大人しく手懐けるために狭く不快な場所へ連れて行くのである。そのようにした後、国王たちはそうした大人しい雄象を活用するために購入するのである。懐柔させられた雄象のうち、ある象たちは米とバターで飼育され、ある象たちは牧草で育てられる。一方、野生の象は、見つけ出す樹木や野草で、育つのである。

手懐けられた象は人によってのみ、管理飼育される。ただ、頭部には鉄の鎖が巻かれる。この動物は非常に冷静で、投げつけられる矢や他のあらゆるものから、背中に乗る者が攻撃されないように、それらを足の裏で撥ね付けるのである。その土地の国王は白象の上に乗る、その象は、首には宝石で装飾された金鎖を帯び、宝石は両足まで達するのである。

¶その土地の男子は一人の妻だけで満足している。¶その土地のすべての者は男女を問わず、
第 84 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

鉄の刺し傷を肉体に刻印する。その傷口に決して消えない多彩な色付けを施し、かくして常に彼らの肉体は彩られている。¶万人は偶像を崇拜するが、朝寝床から起床した時、東方に向きを変え、合掌して、かく祈る。三位一体にある神よ、その神法が我々をお守り下さいますように、と。¶この土地には、オレンジに似たような一種の林檎がある。果汁がたっぷりて凄く甘いのである。¶ここにはまたタル(Tal)と呼ばれる木がある。非常に大きな葉身を有し、その上に文字を書くのである。

インド全土で、紙に文字を書く習慣がなく、カンバイアのような都市を除くと、そもそも紙というものがない。件の木には、大きなかぶに似た果実がある。堅い皮殻の下は、高品質の果汁のように柔らかく、食すると非常に甘く、大変に美味しいが、その皮殻に比して低価格である。¶この土地では、度肝を抜く蛇を飼育している、恰も両足のない一人の男子のように太く、長さは6コヴァード(0.66m×6=3.96m)ある。住民はその大蛇を焼いて、大いなる悦楽と歓喜を以って、食し、また大蛇を大いに尊重している。¶さらに、小エビの大ききの赤アリの胡椒を添えて食べ、これは珍味として、喜ばれる美味しいもの(好物)と看做されている。¶同土地では、豚に似た頭を有する動物、牛の尻尾を有し、一角獣のような角だけが額に生える動物(サイ)がいる、ただ、角はより短く、その長さは1コヴァード(66cm)である。色の付いた象より大型で、常に同種間で闘っている。その角であらゆるものを有毒に作り変えることができるからという理由で、大いなる名誉を得ている。¶キタイ(契丹)に向かってこの地域の辺境に、白牛、黒牛が棲息する。馬の鬣と尻尾を持って生まれる最も貴重なるものであるが、髪の毛のボリュームが最も多く、最も細く、繊細で、羽毛のように軽く、両足まで達するのである。それを以って、銀の価値ありと評価される。これらの髪を束ねて、それを神々や国王の献上に資する、あるいは金か銀で飾り立て、馬の臀部の上に載せて、それらが広がると馬の臀部を覆うのである。あるいは、胸部を美しく飾り立てるために、それらの髪を鎖(紐)で首に掛けるのである。これが最も珍重される活用術である。さらに騎士は槍の切っ先にそうした髪の毛を垂らし、偉大なる貴族(豪族)の御旗印として自身の前方にそうした髪の毛を突き出すのである。

第 84 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶都市マシム(Maçyn ; Mangi : 蛮子)に加えて、すべての中で、最良の土地はキタイ(Cathayo ; 契丹)である。その領主は大カアン(Cham)と呼ばれる。その言語では帝王の意味である。彼の真の主要な都市はカンバレスキア(Cambaleschia ; カンバリク : Khanbaliq[元大都])である。

この都市は四角形で、周囲は 28 マイル(約 45 km)である。この都市の中央には要塞、あるいは大変に堅固で、まことに美しい城が聳え立ち、中には王宮がある。加えて、都市の四隅にそれぞれ城があり、円形城で、防衛のために建造されたものである。各城の周囲は 4 マイル(約 6.4 km)ある。内部には、戦争・戦闘のための武器が常備され、都市と闘うために、また必要とされる時のために、継続的に改良され、装備が整えられる。闘うためのすべての他の戦術・戦法が推敲・改善される。都市の上に聳える真の城には、上記の 4 城塞のために、アーチ(穹窿)型城壁があり、偶発的にせよ、国王に対する謀反騒動が起きた場合、国王はそのアーチを通して、それぞれの城へ行くことができる。

¶この都市から陸路で約 15 日間移動すると、もう一つの大都市が横たわっている。ネプタイ(Neptay)と呼ばれる。この都市は少し前に、帝王によって再建された。周囲は 30 マイル(約 48 km)ある。この都市は、すべての都市の中で最も人口が多く、人々が溢れている。¶これら両都市は、彼が伝え、断言するところ、家並み、宮殿、都市のすべての他の建物や家具はイタリアのそれに似ている。人々は穏やかで、慎重で、分別があり、他の人々より豊かである、と。¶その後、アヴァを出発して川を經由し、海に向かって進み、17 日後、河口に到着し、そこはゼイトン(ザイトン[泉州市])と呼ばれる大きな港である。そこから川に入り、10 日で非常に大きく、極めて人口の多い都市に到着した。住民はパウコニア(Pauconia)と呼んでいる。周囲は 1 万 2 千パツソ(約 18 km)。彼はそこに 4 か月滞在した。

Pauconia :

<https://ilcantooscuro.wordpress.com/2021/11/09/i-viaggi-di-niccolo-de-conti/>

(URL 最終閲覧日付 : 2024 年 2 月 19 日)

¶ここでは、ブドウの木が生育するが、未だ非常に少ない。インド全土で、ブドウの木もワインも不足している。余りにも僅かのブドウの木からワインは製造されず、これらのブドウが木から生育している。ワインを製造せず、ブドウの木を伐採して、まず最初にその木を捧げものとして神々に供え、ブドウの木は消え、一切見られなくなるのである。¶そこには松の実、アンズ、クリ、メロンが生育し、これらは小さく、緑色で、白檀、樟脳がある。

第 85 葉 : ニコラウ・ヴェネト旅行記 :

¶世界の最果ての地に関して、インド内陸には 2 島が存在する、2 島は Jaua(ジャワ)と呼ばれ、1 島は周囲 3 千マイル(約 4,828 km)で、もう 1 島は 2 千マイル(約 3,219 km)になり、東方に向かって存在する。名称については、大島と小島と区別され、知られている。

海に向かって戻る時、両島へ行った。陸地が長く伸び、航行に 1 か月を要した。2 島の間は最も接近しているところでも、100 マイル(約 161 km)に及んだ。その両島で、妻と子供たち、巡歴の同伴者とともに 9 か月楽しんだ。¶住民は、すべての他の民族の中で最も非人間的で、残酷である。彼らは鼠・犬・猫を食らう。すべての他の不潔な動物を食うのである。残酷さにおいて、他の人種に君臨する。人間を殺すことは遊び(ゲーム)と捉え、それによって、懲戒・刑罰が与えられない。¶支弁能力のない負債者は、負債を負わせている者(債権者)に拘束

される。ある者たちは奉仕するよりも死を望む。こうした者に対して、両手に剣が翳され、通りへ出て、強心臓でないと見られる者を殺害する。彼らより勇敢な者たちであっても、通りへ出て、彼らを殺害するのである。その後、彼を拘束した者に対して、彼を殺害した者に裁判所への出頭命令が下されるものの、その負債者の死について、殺害者を強制的に納得させるようにしているのである。誰かが何らかのアラビア人の三日月剣か剣を購入し、それを目撃した最初の者を恐喝し、鉄製の剣先の切れ味を験させる。そのような男に死の損害を与えることなく、通りががった者がその傷を見たのである。一方、相手を傷付けるそのような殺害が首尾よく実行されたこと、剣をまっすぐに突き刺して、まことに非凡な一撃を与えたことが称賛されるのである。男たちのそれぞれはその意志を実現するために望むすべての女性を手に入れるのである。¶彼らの間で最も慣れ親しんだ遊戯に、闘鶏がある。かくして、鶏を持参して、非常に多種多様な戦法で闘わせる。各人は、自分の鶏が勝者となる希望を抱いている。こうしてまさに現場にいる者を見ていると、賭金を投げ入れ、各人は賭金を投げ入れられた鶏を指名する。別の鶏に勝利する鶏について、敗者は投げ銭を勝者の別の鶏に賭けた者に持って行くのである。¶大ジャワでは、多くの場合、鳩に似た、とても細く、繊細な羽毛を有し、極めて長い尻尾を持ち、常時に木にとまる必要のある大きく、両足のない鳥が見られる。

第 85 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

その肉は食用にしないが、その羽毛とその尻尾は高価で、彼らの頭部を飾るために使われる。¶これらの島に加えて、東方に向かってさらに 15 日間航行すると、2 島が現われる。そのうちの 1 島はサンダイ(Sanday)で、そこにはニクズクと島花であるマシ(ニクズク[ナツツメグ]の皮を乾燥させた香辛料)が生育する。¶もう 1 島はバンダン(Bandan)と呼ばれ、そこにはクローブ(丁子)だけが生育し、そこからジャワ島へ運ばれる。バンダンは 3 種類の鸚鵡が飼育されている。1 種類目はカラフルな羽毛と黄色の嘴。2 種類目は、多彩な羽毛を有し、我々はノロス(noros)と呼んでいる。その意味は「光輝」で両方とも鳩の大きさがある。3 種類目は雌鶏の大きさの白色であり、我々はカシヨス(cachos)と呼び、より貴重であるという意味である。その理由は、余りにも驚嘆するほど話すことをよく学習し、質問するものに返答することが出来るのである。この両島とも、人々は黒人種である。これらの島々からの船出は、航行が可能ではなく、風が航行者を妨げるのである。

Noznozcada(Noz-mozcada):ニクズク

https://www.conquistesuavida.com.br/noticia/noz-moscada-os-beneficios-desse-condimento-para-a-nossa-saude_a9672/1

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

¶ニコラウはジャワ島を後にして、旅行に必要なものを携え、西方へ向かい、一都市、シンパ(Cyampa)と呼ばれる海岸都市に着いた。ここにはたくさんの木のアロエ、樟脳があり、金も豊富である。今回の旅程で、ここに 1 か月滞在した。

¶そこから出発して、数日間を航行し、まことに高貴なる都市(コロエン：Coloem)に到着

した。周囲は1万2千パツソ(約18km)。ここはマラバール(Melibar)州である。そこではコロビ(Colobi)と呼ばれる生姜、ブラジル胡椒、グロッサと呼ばれるシナモン(肉桂)が収穫される。¶この州では、足のない蛇が棲息し、長さ6コヴァード(約4m)、驚嘆に値する動物で、こちらが危害を加えようとしないう限り、一切危害を加えてこない。子供たちを眺めて楽しみ、愛情を注ぐと、人の視線を誇示するのである。横になるとその頭部はウナギに似ているように見える。鎌首を擡げると、頭部が平らに広がり、その背面は多種多様な彩色で化粧した人の顔のように見える。懐いて、得意の魔法をかけて、捕え、誰にも危害を加えず、蛇をガラス容器に入れるとその形状に収まり、かくして驚嘆すべき蛇を見せびらかすために持ち歩くのである。

¶同州、スリナリア(Sulinaria)の近くで、別種の蛇が存在し、4足を有し、

第86葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

相当長く、大狗ほどの大きさで、狩猟で捕獲し、食用にする。我々の土地のガマ(gamas)、あるいは鹿ほどには危害を加えることはなく、また、その肉から非常に美味しい食べ物が作られる。その皮は多彩な色を放ち、カバーに適している。見栄えがよく、美観に堪える。¶さらに同地域で、まことに驚嘆すべき他の蛇が棲息する。長さは1コヴァード(約66cm)にも満たない。蝙蝠のようであり、体の長さに沿って、7つの頭が次々と並んでいる。木に棲息するその蛇は非常に軽快に飛翔する。これらの蛇はすべての他のものに比べると非常に有害である、吐息だけで人を殺害するからである。¶そこにはまた空飛ぶ山猫がいる。前足から後ろ足まで、獣皮の肌はぴんと張っている。一休みして、両足を前後に伸ばして、それを翼として、しっくりさせて、一本の木からもう一本の木に飛び移るが、その時に捕獲する。狩人たちはこれを目撃し、執拗に追跡し、山猫が疲れて落下するまで追い詰め、まんまと捕えるのである。¶この土地には柿(cachy)と呼ばれる樹木が数多く生育している。その幹あるいは先端に松の実に似た果実を結ぶ。然るに、その大きさは一人の成人男性が、実のうちのひとつを持って来るのに十分である。その皮は緑色で、少し硬く、しかし、指を実の中に差し込むと、割れる。無花果のように、中には250から300個の林檎果実がある。甘く、果実の間には分割された小葉があり、内部に平凡な味の果実が含まれ、栗のように堅く、栗と同じように調理するのである。火に入れて、まず最初、割れずに、弾けるものの、火力不足なのである。外に出た堅皮は牛の餌として与えられる。この内部の果実は皮が一切ない。ある場合には、地面の下のこの木の根にこの果実が見られ、他のものより、良質で、より旨味があるので、国王や大領主に献上する習いがある。その木は巨大な無花果に似て、椰子の葉のように、浮彫のある葉である。材質はツゲ(柘植)のように思われ、多くの物に利用され、それ故に、重宝される。

¶アンバ(Amba)と呼ばれるもう一つの果実があり、まさしく緑色で、クルミに似ているが、桃より大きく、その堅い皮は苦い。中身は蜜の味がある。熟す前に味がよくなり、水に浸し、他の果実の場合、緑オリーブと同様、味を調べて保存する。

第 86 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶ニコラウは都市コロエン(Coloem)を去り、3日の旅程で、コーチ(旧名コーチン：Colchym：南インドの重要な貿易港を擁する。欧州初の植民地。1524年ヴァスコ・ダ・ガマ病死)に到着した。その都市は市域が5千パツソ(約7.4 km)で、シジャン(Sichā[Colchan)と命名される川の河口にある。彼は数日間、河を航行し、夜に河岸でたくさんの火が焚かれるのを見て、それは漁師の仕業であると思った。ニコラウ曰く、これは毎夜漁師たちが行い、漁船では、笑いが起こり始め、彼らは、イシペ、イシペ(Icipe, icipe)と叫んだ。これらの掛け声は、魚や怪物を呼び出すもので、彼らは夜に水から出て、薪を握り、火が着くまで石を叩いて、こうして薪を燃やすのである。そうすると大量の魚が火の明かりを求めて来ると、それらを捕獲して、食らうのである。日中は常に水にいるのである。彼らは何度かはそのようにして捕獲する。彼が言うには、呼び出しの声について、男女を問わず、捕獲に違いはないということである。この全地域においては、コロエン(Coloem)と同様に同じ果実が生育している。

参考：火振り漁：

<https://kotobank.jp/word/%E7%81%AB%E6%8C%AF%E3%82%8A%E6%BC%81-687283>

(URL 最終閲覧日付：2024年2月19日)

¶その後、ここから出て、コロングリア(Colonguria)に到着した。もう一つの河口に位置する都市である。¶そこから、パルリア(Paluria)とメリアンコタ(Meliancota)に行った。彼らの間で Meliancota は換言すれば、大都市で、周囲が9マイル(約14.5 km)に及んだ。¶その後、カリカット(Colchud；Calicut)に行った。海岸に近く、周囲が8千パツソ(約12 km)、全インドでも高貴な都市で、交易港である。この地域では胡椒、漆、生姜、シナモン(大)、ミロバランノキ(chebuli, queblos：シクンシ科モモタマナ属落葉高木；果実は黄色染料・黒インクの原料、薬用)、ガジュツ(zedoaria；gedoaria：ショウガ科の園芸・薬用植物)が豊富に生育し、後二者は芳香性果実である。

¶この地域だけは、女性が望むだけ男性を抱えることができる、かくして何人かの女性は、自らの願望を実現するために10人以上の男性を有している。これらの男性は彼らの間で、各人が示す印を共有している。これは女性の願望を満足させるためである。女性の家に入る者は家の扉の上に印を残しておく。だれか他の男性がやって来て、入ろうとして、その印を見つけると、出直しになる。彼女が望む男性にすべての子どもを与えるのは彼女の自由意志である。子供たちは父親の財産を相続するために、継承せず、孫たちが相続するのである。¶その後、そこから出発して、15日後、カンバート(Compaya；Cambaia)に到着した。西に向かう海岸都市である。周囲は12マイル(約19.3 km)ある。ここには spico nardo, インド漆、ミロバランすもも(李)(mirabolani, mirabolanos：中央アジア・コーカサス地方原産。バラ科サクラ属の落葉小高木)が生育し、シルクがたいへん豊富にある。¶そこ

の出身で、司祭の家系バカロス(Bachalos ; Bancani)存在し、この係累は一人の妻のみに満足している。

第 87 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

法の定めるところで、妻はその主人とともに茶毘に附されなければならない。これらの僧侶たちは生命ある限り、果実、米、牛乳、野菜を除いて、何も口にしないのである。¶そこには、多くの野牛、馬のようなサキ、そのたてがみはもっと長く、頭を後方へ反らすと、尻尾のところまで届くほどに長い角も有している。余りに角が大きく、旅程で水一杯の瓶やあらゆる飲料水を運搬する時にその角にぶら提げるのに格好である。¶ここから再び、カリカット(Colchud ; Calicut)に向かって、ソコトラ(Secutera)と呼ばれる島に行った。陸路で西に向かって 100 マイル(約 161 km)の距離で、周囲は 60 万パツソ(888km)。この旅程で、彼は 2 か月滞在した。この島にはセクトリノ(Secutrino)と命名されるアロエ亜麻が生育する。この島の大部分はネストリウス派のキリスト教徒で、占められている。

¶この島の前方、5 千パツソ(約 7.4 km)を下らない距離に 100 マイル(約 161 km)に及ぶ 2 島が横たわる。一方の島には男性だけが住み、もう一方の島には女性だけが住んでいる。ある場合には男性が女性の島に出向き、またある場合には女性が男性の島に向かうのである。しかし、予め決められた 6 か月に満たないうちに、各人は自らの島に戻らなければならない。もし、運命によって彼らに定められている日数以上、ある者が他方の島に留まり続ければ、即座に彼らは落命する。

¶ここから出発して、前方に向かい航行し、5 日後、大変に豊かで、いと高貴なる、美しい建築物で飾られたアデンという名の都市に到着した。

アデン：

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A2%E3%83%87%E3%83%B3-26175>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

¶その後、ここから出発し、エチオピアに向かった。7 日後、バルバ(Barba:ベルベラ：ソマリア北部の港町)と呼ばれる港に到着した。

¶そこから 1 月の航行後、紅海の港ビダ；ジッダ(Byda : Jeddah : Zidem : サウジアラビア西部の都市)に到着した。

¶その後、難渋航行の 2 か月の果てに、シナイ山の近くまで辿り着いた。彼は陸に上がり、妻と 4 人の子ども及び他の多くの従者たちとともに、砂漠を通り、エジプトの都市カラス(Carras)に到着した。その地で妻をペストで亡くした

¶かくして、海路、陸路で艱難辛苦の大仕事を成し遂げた後、二人の子どもを連れて、故郷のヴェネチアに帰還した。

第 87 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

¶インド及び東洋のすべての地域の生活と習慣について、彼は質問した方々に対して、以下

のように回答した。

インド。『全インドは3分割されている。』『第一の地域はペルシャからインダス川まで広がる。』『次はインダス川からガンジス(ガンジェス)川まで。』『第三はガンジス川を越えた地域。ここは、豊かさや人種、その食生活において他のインド諸地域より優れた地域である。生活、規律、習慣は我々に似ている。その上、彼らは大邸宅に暮らし、我々同様に住環境がよく整えられ、かくして、部屋(寝室)はその美観に誇るものがある。家具・調度品は非常に清潔で、極めて巧みに製作され、整えられている。非常にまことに正しく生活し、野生の人々の全的に残酷で野蛮な生活とは無縁である。非常に温厚で敬虔なる人々である。彼らは殆ど非常に裕福な商人である。その多くの中から、一人だけが、まことに豊かな商品を積み込む40隻を所有するのであり、各船舶は推定5万ドゥカート(ヴェネチア金貨：当時最高峰の純度99.47%：金3.545グラム含む)になるからである。

『これらのインドの人たちは我々同様にテーブルクロスを敷いた高いテーブルで食事をする習慣がある。その上、御馳走や他のものに銀製食器を利用している。全ての他のインド人は、壇状の地面やカーペットに座して食する。』『インド人はブドウの木もワインも持たないが、水で米を足踏みして、そこに紅色のものを混ぜ、樹液を加えて、味を調べ、それは正しくワインのように見える。』『タプロバーナ島では、タル(Thal)と呼ばれる樹木の枝を切って、高く吊るす。そこから非常に良性的なまことに美味しいジュースが採取され、それは飲みなれたジュースである。』『インダス川とガンジス川の間には池(瀉湖)があり、その水は全く素晴らしい味で、飲むと大いなる歓喜に抱擁される。周囲の全ての地域はこの水を求め、さらに、遠方に住む者もこの水を求めてやって来る。水を求める多くの軽快な馬を送り込んで、

第88葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

かくして、毎日新鮮な水を絶やすことがないのである。『彼らには小麦がなく、何らかの粉類を持たないので、一切のパンを持たず、食糧はすべて米、チーズ、肉類である。彼らには野生の雌鶏、ヤマウズラ(山鶉)、雉が豊富で、多くの他の狩鳥に恵まれている。彼らは山岳狩猟に優れた天賦の才を発揮する。』『彼らは、毛髪をたっぷり生やすのに、髭を蓄えず、我々同様に理髪師を利用するのである。彼らは肩甲骨にまで達するほど長髪にしている。戦闘に立ち向かうとき、絹繩を以ってうなじで髪を束ねるのである。彼らは質実剛健な男児で、短命ぶりは我々に等しい。』『彼らの寝台は金泥が施され、ベッドカバーは巧みに刺繍が施され、そこでぐっすり眠るのである。』『彼らの服装の形状には地域的な多様性があって、同一のもの一つもない。』『ここでは等しく羊毛を欠いている。しかし、亜麻(リンネ)と絹は大量にあり、彼らはそれで衣服を作っている。男女を問わず、殆どすべての者は膝まで覆う亜麻布切れを巻いている。もう一枚の着衣を羽織るだけ、亜麻と絹製の着衣で、上着に羽織るのである。男性は非常に長く、膝まで覆ってしまい、女性はくるぶし(足首)まで達する。余りの保温効果があって、これ以上の重ね着は不要である。それ故に、丁度古代の社会的地位に我々が見るような、社会的地位(ステイタス)に応じた、絹製か金製の赤紐付きの薄靴底だけ

を履いている。ある場所では、女性は、金・絹刺繍を施した、極めて繊細な革製靴を履いている。同女性は宝石を纏い、金製のブレスレットを両手に付けて両腕が美しさを際立たせ、首筋と両脚には宝石を嵌め込んだ首輪と脚輪(重量：3libra;ポンドの起源：1libra≒500g)を付けている。【男性がすぐに見つきたい地方の女性はすべての都市部に拡散しているからである。各女性はその寓居(小家屋)に住み、その純真さと芳香、またまことに優しい気立てを備えている。男性の各年齢に応じて対応してくれる。インドの全ての女性は男性に豪華な贅沢さを満喫させる準備は常に万端である。それ故に、男性と男性の肛門性交について、インド人の間では聞こえてこないのである。

第 88 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

【女性の頭髪装飾は多くの方法がある。大多数は絹紐で頭髪をリボン状に編み上げて、金糸刺繍のベール(服飾)で頭部を覆うものである。ある地域では頭髪を頭部の中央で束ね、頭髪中央の頭頂に極彩色の紐附の金糸で結んだショール(被り物)を載せ、その極彩色の紐附の頭髪先端部を下へ垂らす。

また他の女性は黒髪鬘(かつら)を載せる。黒色が際立つことで、美しさの芳香がいや増すからである。また、ある女性は色塗りした樹葉で頭を覆う。キタイ(契丹)に暮らす女性を除いて、これらの女性の誰一人として顔に化粧を施すものはいない。

【インド内陸部では、男性が一人以上の妻を娶ることを容認するものではない。しかし、他のインド人は、その大部分において、原則を有していたキリスト教者から異端とされたネストリウス派を除いて、その悪しき欲望を満たすために望む女性すべてを手に入れる。異端であるが故に、キリスト教ネストリウス派と呼ばれるのである。キリスト教ネストリウス派はインド中に拡大し、一人の女性だけを連れ添って一生を送るのである。【全てのインド人は唯一の方法でその墓を立てることはない。先端のインドは他に比べてその埋葬の壮麗な儀式において、優位性を保っている。彼らは地下に墓穴を掘り、穴壁を堅固で美しい装飾を施し、内部に金製布団(マットレス)の極美装の寝台(ベッド)に亡骸を寝かせる。その周囲にはまことに高貴な衣服が満載の籠を並べる。指輪ははめたままにし、地獄で死者がそれらを援用する必要があると思われる場合を想定している。何人もそこに入ることが出来ないように墓穴の出口は壁で閉鎖する。その上に非常に豪華で美しい穹窿(丸天井)を建造し、さらにその上に屋根を設置し、墓の外へ排水する。かくして、格好の方法によって、亡骸は、一層長期間保存され得るのである。【インド中部では、男性の死体を茶毘に附し、彼らとともに多くの場合、その妻を生きのまま、結婚の際の同意に基づいて、一人か多くを火葬で燃やすのである。【そうした亡骸が一人だけを除いて、他に妻を持たなかったとすれば、主たる正妻は法によって、茶毘に附されなければならない。【男性は

第 89 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

第一夫人の他に他の女性も娶り、何人かは、夫の死を以って、その夫の葬式を名誉あるもの

と受け止めるという条件をのむものとする。これは彼女らの間では大変に名誉なことであると看做される。男性の亡骸を非常に豪華に装飾された自身の寝台(ベッド)に寝かせ、所持する最高の衣服を着せる。そしてその上に、その周りにまことに馥郁たる沢山の棒状の物を並べ、それらに火を点す。さらに、非常に見事な装飾を施された衣服を纏わす。シャルモー(初期のクラリネット：オーボエ)とクラリオン(オルガン)の伴奏に、大参列者の数知れぬ葬送大音声が響き渡り、彼女自身、炎の周りで、愉快的表情を浮かべて歌い、夫の亡骸が燃やされ始める。炎の近くには、彼らの間でバカロス(Bachalos; Bacani)と呼ばれる聖職者がいて、豪華な聖布で見事に装飾された高座から、件の女性に向かって、美辞麗句を以って慰めと助言とともに、称賛し、彼女に曰く、死を恐れるな、取るに足らず、空虚な現世を軽視し、死後、夫とともに大いなる歓喜、大いなる富、高価な衣服や他に多くの物が手に入ることを約束する。彼女は炎の周りを何度も歩くのを終えて、彼女に言葉を垂れた聖職者の高座の傍に身を置いて、纏う服を脱ぎ捨てる。肉体は彼らの間の習慣で前もってよく浄められ、極薄純白の布を巻いて、彼女を称賛する聖職者が彼女を諭し、癒して、彼女は炎の中に身を投げる。ある女性たちは、多くの場合そうであるように、炎の中に横たわり、嘆き悲しむ、あるいはそこから出たい、驚愕の恐怖で失神すると思われる他の女性たちを見て、恐怖感を抱いてしまうと、それ故に、その場にいる者たちが炎の中に入るのを勧め、あるいは、彼女たちの意思を等閑視の上、彼女たちを中に投げ入れてしまうのである。茶毘が終わると、彼らの灰を集め、丁寧に讃えて、清潔な容器に収め、立派な記念碑を建造し、そこに容器を安置する。様々なやり方に次いで、その死者たちを追悼することになる。【インド内陸部の人々は誰か死者が出た場合、頭に袋を被る。そして道中、長い棒を高く掲げ、上から下まで数枚の手紙が絵付けされ、浅浮彫される。そこで3日間泣き、金管楽器を奏で、等しく、神への愛の証しに幾ばくかの食物を供える。

第 89 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

さらに3日間泣き続け、加えて家族全員が集められる。その上、すべての近隣住民が死者の家に出向き、その折、家では調理されず、外から、料理された物が持ち込まれる。死者の親類・友人らは数日間の哀悼の末に口に苦き葉を一枚啜る。父か母を亡くした時、子どもたちは丸1年服を着替えず、一日に一度だけでないとしても、食べる量は減らず、爪、頭髪を切らず、髭剃りもしない。その上、臍まで裸身の多くの女性は死者の周りにいて、嘆き悲しみ、自ら胸や乳房を叩いて、痛みを声に出して叫ぶのである。その内の一人が立ち上がって、歌曲を以って死者に対するあらゆる称賛の言葉を捧げ、それに呼応して他のすべての女性は死者の周りで、続けて、歌い、まさにその称賛の言霊に応ずる。そして死者が称賛に価する何かを实践した縁由地やそのやり方を語るのである。多くの者は、死者が茶毘に附された直後、遺灰を集め、金製か銀製容器に収める。聖職者たちの助言に従って、神々に捧げられ、建造・聖別された場所に容器を持って行き、聖職者たちは彼らに入口の存在を告げる。【バカロス(Bachalos; Bacani)は彼らの聖職者で、生命ある物を一切食せず、主として、全ての他

の動物の中で、牛は男性にとって、最も役に立つと言われている。荷物を運搬するのに利用するからである。それ故に、牛を殺し、あるいはそれを食するのは大罪と看做される。これらの聖職者は米・野菜、果実・豆類を主食とする。一人以上の妻を娶ることはなく、彼女は夫が死没すると、夫とともに茶毘に附される。彼女は夫の亡骸とともに、首下の腕を彼の体軀に横たえて、かくして、彼を抱きかかえて埋葬される。火炎にあっても非常に辛抱強く、断末魔の痛みを顕わにすることはない。『インド中には、将来のことを予測できるように一意専心勉学に励み、占星術に専念するバラモンと呼ばれる哲学の宗派がある。彼らは正しく、神聖なる生活を送り、道徳に秀でている。『彼らの中の一人は、3000歳の人を見たと言った。それは奇蹟であると看做され、それ故に、彼が行きたい所へ、新たなるものやまことに不思議な(超自然的な)ものを見るために少年たちが後を追うのであった。『彼らの多くはジオマンシー(土占い、砂の科学)と呼ばれる技術を利用する。

第90葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

それに関して、彼らは非常に経験豊富で、恰も既に起こったことのように、来るべきことを極めて正確に予測できるのである。一方、呪術・魔術に傾倒する者は、望むときに大気に暴風雨を起こしたり、暴風雨を往来させる。それ故に、彼らの多くは自身が食するのを目撃する者を恐れて、秘密裏に食するのである。その結果、ジオマンシーの実践者は、邪眼や凶眼の魔術に与しないようにしている。『件のニコラウは真実として語った。一人の船主が、一隻の所有船で海のど真ん中であって、風もなく穏やかである。その船員たちが、それ以上船内に留まらないように案じていたが、マストの元にテーブル1台を置くように命じ、そこで何回も呪術を唱え、多くの場合、ムティアン(Muthiam)と呼ばれる神を呼び出した。その際、アラビア人の一人の男性が悪魔に憑かれ、大音声でがなり立て、分別を欠く人間のように船内を飛び跳ね、走り回り始めた。テーブルにやって来て、幾つかの石炭を擲んで食べた。そして雄鶏の血を呑みたいと申し出た。彼に一羽の雄鶏を与えると、首を切って、口でその血を吸った。雄鶏を投げ捨てた後、彼は自身に何を要望しているのかと訊ね、彼らは風を望んでいると答えた。そして彼は3日後、非常によい風が吹くと約束した。その順風で安全に港に到着すると、風がどこから吹くかを両手で指し示し、熱狂と分別を兼ね備えて、風の力を期待するように助言したのである。暫くすると、悪魔に憑かれたそのアラビア人は半死の状態で甲板に倒れた。彼が実行したこと、発言したことなど、一切何も覚えていなかった。彼が言葉を発すると、風が吹いて、彼らを数日後に良港に運んでくれた。『インドに航行するさらに多くの者たちは、南極の星座に支配されている。数えるほどしか、我が北極の星座は見えないのである。彼らは羅針儀で航海せず、南極の星座の高低を見極め、船の位置を見定めて、航海するのである。これは、ある測定に基づいて、知るのである。彼らが行う航程及び、ある場所からある場所に至る距離を同様に測定し、海上に浮かぶあらゆる場所を知るのである。

『船舶はわれわれのものより2千バレル(約318キロリットル；バレル(bota):1バレル≒約

159 リットル)大きい容量があり、4つの帆を備え、多数のマストが立てられている。船底部は3枚の板が張られ、一枚の上に一枚が釘付けされ、海上の大波によりよく耐えるためであり、船舶が大波からしっかり守られている。彼らの船舶は、

第90葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

緻密に建造された船室(小)ごとに分割され、そのため、その一部が破壊されることが生じて、別の船室の安心安全が確保され、その航行を続けることができるのである。¶全インドにおいて、人々は神々を崇拜し、彼らは、我々のものに類似した教会を建立する。多くの絵画図像が安置され、祝祭日には、教会は花などで華麗に装飾され、その美観を誇ることになる。教会堂には石、金、あるいは銀、象牙で彫像された偶像が配置されている。その幾つかは高さ60フィート(0.3048 m×60≒18m)に達する。¶その偶像を聖別する方法は、数多くある。彼らは寺院に入る前に、一度は午前、もう一度は晩課の時刻に清水で浄める。ある者たちは地面に腹這いになって、その場で両足、両手を伸ばして、祈りを捧げ、大地に接吻する。またある者はアロエの木と香水を以って、その神々に捧げものをする。¶ガンジス川の近くでは、鐘がなく、それぞれで打ち鳴らす真鍮製の容器があるが、かくして音を出すのである。古代異教徒の習慣に則り、神々への献上品として食物を供する。後日、供え物を食用として人々に分け与えるのである。¶カンバイア市では、その神の偶像を前にして聖職者が人々に説教し、神々への奉仕を諭し、どのようにすれば、神々に受け入れられるか、その結果、生命を断つことを望み、神々の愛のために自ら生命を捧げるような人間こそが来世で大いなる応報を手に入れると説諭するのである。かくして、死ぬことを決め、やって来た者たちが集まり、そのような人々は喉元の周りに幅広の鉄製の首飾りを吊るし、首飾りの外側は丸く、内側は鋭利な剃刀のように造作されている。前部は、胸元まで達する鎖がぶら下がり、鎖に座り込んで、両脚は畳んで、頭は垂れ、両足は中に入れるのである。そして聖職者が口上を述べると、彼らは両足を前へ伸ばして、頭を後ろに倒して、斬首される。かくの如く、神々の偶像に生贄として自らの生命が捧げられる。そして彼らは聖者と看做される。¶ヴィジャヤナガル(Bizeneguer;Bisinagar)では、慣習法として、1年のある時期、2台の車に1体の偶像を載せて、盛大に大勢の人々とともに、町中を練り歩くのである。車には、美貌の娘たちが同乗し、

第91葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

神を讃える数多くの讃美歌を歌う。そして、この信仰の勤行に感動する多くの者は、死を望んで、体が踏み砕かれるように、件の車の車輪の下の地面にその体を伸ばして投げ出すのである。そうした落命はその神に全的に受け入れられる。偶像を載せた車自体を崇拜し、畏怖する者たちは、背中に穴を開けて、背中越しに車輪が通過し、その肉体が車輪に食い込み、死に至るまで、車の下に引き摺り込まれるがままにするのである。この行為は神に大いに受容され、これを以って極めて偉大なる犠牲を成就したと言われる。¶荘厳な主要な3祝祭は

年中行事として、実施され、各祝祭にはすべての老若男女が新調の晴れ着を纏い、海水か河川水でまず体を浄め、丸3日間、宴会、歌舞音曲実演以外には何もしないのである。第二の祝祭は、期間中、胡麻油をたっぷり注ぎ、明かりが絶えない吊ランプで教会堂内及び、教会外側の最先端部も照らし、昼夜を問わず、燃やし続ける。第三の祝祭は、あらゆる通りに小舟のマストのような棒が高く掲げられ、そこに上から下まで、贅を尽くした金刺繍布(バナ-ー)が垂れ下がる。この祝祭が続く9日間毎日、上記の棒壇上に善良なる表情をした敬虔で信仰心の篤い一人の男性が座し、これは善良なる意思の顕現として、人々のために神に懇願し、神の恩寵と応報を得んがためである。この壇上を目がけて、人々はオレンジ、レモン、馥郁たる果実を投げつけるのである。彼はそれを懸命に我慢して耐え忍ぶ。【さらに年間もう3日間の祝祭があり、特製の黄水を互いに掛け合い、国王及び王妃もその黄水を浴びるに任せるのである。これは気晴らしで笑いを誘うためにそうするのである。かくして全員が満遍なく祝祭を楽しむのである。【結婚式は、歌、宴会、ダンス、トランペット、他の全ての演奏楽器を以って挙行されるが、オルガンを除くと我々の場合と同じように慣例行事となっている。【大盤振る舞いの宴会は、昼夜を問わず、開催され、歌い、演奏し、歓喜乱舞する。彼らは、我々と同様に輪舞し、歌う。他の者たちは歌いながら、踊り、一組がもう一組を追いかけて踊り、後の2人は回転をする前、ゆっくりと進む。前の2人は、両手に巧みに絵が描かれた2本の棒を持っている。そして前の2人はその棒を出会い頭に後の2人に渡す。

第91葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

かくして、一組の2人がもう一組の2人に会おう度にその棒が手渡しされ、入れ替わる。大団円となる【ガンジス川の向こう側に暮らすインダス川上流の者たちは、こうした沐浴を慣例としないが、他の全ての者たちは、冷水の日でも多くの場合、沐浴するのである。【彼らにはオリーブ油がなく、まして桃、梨、サクランボ、スモモ、林檎のような我々の果物の一切がない。【ブドウの木は僅か。こうした土地は既に述べたように一地域だけである。【プディフェタニア州に一切果実を結ばぬ樹木が生育し、地面より3コヴァ-ード(0.66m×3≒2m)の高さがあり、恥ずべき樹木と命名される。ある者がその樹木にやって来て、枝を縮め、その樹木から離れて、枝を再び広げる。

【ヴィジャヤナガルを越えて、北の方角に陸路15日間の行程で、すべてラグ-ーナ(瀉湖)に囲まれたアブニガロ(Abnigaro)山があった。そのラグ-ーナには猛毒獣が満ち溢れ、山とて蛇ばかりであるが、一方、山にはダイヤモンドが産出する。誰もこの山に到達出来ないということから、人間の狡猾な策略がそのような手立てを講じたのである。もう一山がこの山の近くにあつて、少しだけ高い。その山では一年のある時期に土地の男たちが登山し、牛を牽いて行き、切り刻んで屠り、その鮮血で未だ熱い肉をそのために準備した数頭の動物とともに山の頂きに投げ上げると、落下によって肉が石に付着する。そうすると、鷲やハゲワシがそこを通過して、肉を見て、それを獲って、もう一つの山へ運び、そこで、蛇から安全である

ことを確認するのである。その後、件の山にいる男たちは、どこで猛禽が肉を食らうかを見届ける。食べ終わった後、彼らはそこへ行って、肉から落ちた例の宝石を採取するのである。『より価値のあると言われる他の石は、最小限の労力で入手できる。砂状の山でそうした石が見つかるに違いないと既に分かっている場所で、砂と混ざった水が見つかるまで掘削し、その砂をそのために製造した篩(ふるい)に投げ入れ、水で濯ぐと篩を通してすべての砂は落ちて、幾つかの石が残り、すぐに宝石と分かる。これが、あらゆる場所で、掘削し、宝石を発見する方法である。そのためにその領主たちは、掘削する者たちのために、警備員を配置し、宝石を盗まないようにその召使たちを見張るのである。

第 92 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

彼らの服を探し、体の秘密の部位に至るまで隠しているかを見張るのである。かくして盗難と悪事を防ぐ最善策を講じている。『1年は12か月から成り立つ。各月は天の12星座の名前に由来して、命名されている。『彼らの年の時代あるいは千年は、様々な方法で始まる。しかし、大部分はオクタヴィアヌ帝の時代に始まり、彼の時代は世界中が平和であった。彼らは1490年とし、我々は1400年と言うのである。あの地域の中で幾つかには、貨幣がなく、その代わりに、石を使う。石を我々は猫の目と命名している。また、ある地域では貨幣として、針よりももう少し大きい鉄を使う。またある地域では、国王の名前を刻印した証書(カード)があって、貨幣として使う。インド先端の幾つかの地域では、ヴェネチア・ドゥカート金貨が流通している。他の地域では、我々のフローリン(金貨)+半分、と比べて2倍ほどの重量の金片(金貨)があり、また、銀貨・銅貨の流通も少なくない。また、ある地域では、一定の重量の金片を鑄造し、貨幣として使用している。『インドでは初期の頃、戦争において、槍、剣、腕装具、円盾、弓矢を用いる。ある者たちは甲冑、鎖帷子、胴鎧を装着する。内陸部のインド人は大弓、爆弾を装備し、都市と戦うために所有する他の多くの兵器で武装している。彼らは我々のことを自由であると命名し、他のすべての人々を目が不自由であると命名する。彼らは二つ目だけで見ているが、我々は一つ目で見ていると言うのであり、彼らは他のすべての者よりも思慮分別があると言われている。『カンバイアの人々は、紙だけを常用する。すべてのインド人は葉身に書くからである。その葉身からまことに美しい書物を製造するのである。彼らは我々のように書かず、まして、ヘブライ人が葉身の幅横に書くように書かず、葉身を縦にして上から下へ書くのである。『インド人には多くの様々な言語が存在する。『彼らは慣例的に多くの奴隷を有している。支払い能力のない債務者は自身、貸主に対して借財の形(かた)とされるのである。『裁判の何らかの刑罰に相当するものの、裁判を強要するに十分な証人が見つからない者について、宣誓をさせる。『宣誓は3方法が行われる。第一の方法は、宣誓を行う然るべき偶像の前にその男を連れて行く。件の偶像に罪なきことを宣誓する。すぐに斧に似ているような熱い鉄が準備され、宣誓が終わると、

第 92 葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

舌で件の鉄を舐めなければならず、貸主に対して、今後悪事を働かないとして、無罪放免とされる。他の場合は、まず宣誓が行われ、両素手で、熱い鉄を数回触らなければならない。どこかに火傷の跡が残れば、罪人として処罰され、火傷がなければ、あらゆる刑罰・犯罪から無罪放免となる。宣誓実施の第三の方法、これが彼らの間で最も一般的で慣例的である。偶像の前で煮えたぎるバター(油)が溢れる鍋を持ち、罪なきことを宣誓しなければならない者に対して、二本の指をそのバター油に差し入れ、すぐに亜麻布で押さえ、その布が開封されないように封印し、3日間固定する。そして指を解き、損傷が見つければ、すぐに応報刑罰が科される。無傷の状態であれば、無罪放免となる。『インドには一切のペスト(黒死病)は存在しない。彼らはその病魔、疾患流行地域について何も知らない。我々の地域では、人々が苦しめられている。それ故に、人々や住民は大群衆の規模で罹患し、想像を遙かに超えるものである。多くの場合、戦場においては、10万人の10倍以上が動員される。彼は一つの戦いについて語った。戦いの勝者たちは自宅に勝利の喜びとともに12台の車両に金の鎖と絹紐を積んで、凱旋したのである。死者たちはともにその髪を後頭部で束ねて帰還する。彼は数回に留まらず、彼自身も戦いのどこかの部隊にいたことがあったと言った。そして、それは現場を目撃するためだけであった。ある地域からまた別の地域に移動する外国人として知られた後、彼らは彼を危険に一切晒すことはなかった。『最大と命名されるジャワ島では、一本の木が生育するが、僅かの量で、その内部には非常に繊細で幹と同様に長い鉄のような木片が見出される。肉に突き刺さるような件の鉄の断片を持っていくかなる男性も、鉄如きで傷付き得ないほどの能力を備えている。それ故に、多くの男性は自身の皮膚を切り割いて、肉体にその鉄を縫い込むのである。このことは彼らの間で、大いに尊敬を集めることになっている。『不死鳥の諸々の事は、ラクタンティウス(240年頃~320年頃：初期のキリスト教著述家)がその著作の中で、寓話と看做していない。インドの最内陸部で一羽のセメンダ(Semenda)と呼ばれる鳥が存在するからである。その嘴は

第93葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

穴の開いた多数の横笛(フルート)が一つに束ねられているかのようなのである。死期が近づくと、その巣によく乾いた薪を集め、その上に横たわり、嘴のすべての横笛を余りにも素晴らしく魅力的に吹き鳴らし、囀るので、耳を傾ける者は悦楽の境地に誘われる。その後、薪に火が点くまで、翼を全開で激しく羽ばたかせ、その炎に包まれるに身を任せる。暫くしてその灰から一匹の幼鳥が生まれ、その幼鳥から件の鳥が誕生する。その土地の住民たちは、その鳥の嘴に似せて、非常に甘美な音色の、心地良く響く楽器を製作した。ニコラウはその音色に心底うっとりした。他の者たちは彼がかく驚嘆したのを見て、そのような楽器が一体どこで、どのように始まったのかを彼に伝えたのである。『インド先端にあるセイロン島に、アロタン(Arotan)と呼ばれる川がある。その川は魚が溢れかえり、何の苦労もなく、手で掴み取りできるのである。その後、男性がその魚を片手で狭い空間で持つと、熱が出るのであるが、手から放して、暫くするとその熱は鎮まり、快癒する。そのことについて彼らは神々への信

仰に関わる寓話に帰属させているが、全く非常に自然なことで有り得るのである。我々の土地で、誰かが、入眠魚と呼ばれる魚を手にとると直ぐに身震いが来て、手に痛みが走るのである。

ニコラウのこれまでに述べたこれらの事柄は、インド人について繰り返し語ったものである。私はそれらを読者の何らかの教育のために示し、物語の信憑性を高めたのである。それから暫くして、北部に向けた上部インドからもう一人の男性が戻った。彼曰く、別世界と同様に西洋の事柄を比較して、知るために、聖なる神父に派遣された、と。彼らの間で、キリスト教徒が存在するに違いないという大いなる名声がある。カタイオ(契丹)の近くに、およそ陸路で20日ほどで、一王国があり、その国王と臣下はキリスト教徒であるが、すべて異端でネストリウス派と呼ばれている。彼は、真実であることを知るためにかの人々の総大司教に命じた。我々の中で総大司教が最も信頼度の高い人物であるから。彼らの教会は、我々のものより大きく、美しく、すべての教会は穹窿(アーチ)のみで蓋されていると言った。彼らの中で、その総大司教は、金銀を以って、非常に豊かである。家があり、土地があり、各人は毎年、収入として、銀で1オンス(=28.169g)を受け取る。

第93葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

私がかくして彼と、トルコ語とラテン語を話す通訳者を介して話した時、私はただ場所と旅程の距離を訊ねた。人が語るのを聴いて、楽しめる、その風俗習慣や儀式、動物などのような他の事柄。通訳者が分からず、インド人が不愉快になり、自分の意思に従って、知らない言語で望むことを言うことが出来ないことを認識し、質問するのを止めた。しかし、彼らが万人の帝王、大カンと呼ぶものが有する大権によって、その支配下に9人のまこと権勢を誇る国王たちが存在する、とそのように彼は言った。『数か月に渡って上部の土地を踏破し、成し遂げた後、その土地は現在タルタリアと呼ばれ、さらにパルティア人の土地を通して、ユーフラテス川に到着した。その後、トリポリ市で地中海に入り、ヴェネザ(ヴェネチア)に行き、そこからフロレンサ(フィレンツェ)に戻った。彼は言った。数多の都市を訪問し、邸宅、宮殿の建物を見たが、内部同様に外観も我々のものより美観に優れていた、と。かくしてその多くは周囲20マイル(1609.344m×20≒32km)や10マイル(約16km)に及ぶものであった。このことはそれなりの権威筋が言っていたものだ。これを聖なる神父に伝えた後、その篤信からローマ教皇への拝謁に繋がった。彼は金銀を求めることはなかった。我々から派遣されて見聞を広めるだけでなかったとしても、多くの者が数多の嘘八百を並べ立て、多くを望むのを常とするのと違い、お願いするために来た者ではなかったことがよく分ったように思われた。

タルタリア(タタール)：

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%BF%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%AB-93420>

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%BF%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%AB%E4%BA%BA-93425>

(上記 2URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

その時と殆ど同時に、我々の信仰のために、エチオピアの聖なる神父の元にもう 1 組の別の男性たちがやってきた。彼らは、ナイル川付近で生まれ、彼らの間で名の知れた一人の通訳者によって私から質問された。彼らが言うのは、彼らの二人はナイル川の泉のごく近いところで生まれた。そこで私には、かの古代著述家や哲学者には知られていないあのことを質問し、知りたいという欲求に駆られた。プトレマイオスは、その泉について記述した最初の人物であった以上、知っているとは言え。ナイル川の誕生と成長に関して、彼らは多くの不確かなことを憶測を交えて語ったが、彼らが私に話したことを彼らは真実と捉えていた。その後、知る価値のあった他の多くの事柄に関して、それらを書き留めるに値すると思ったのである。彼らはナイル川は昼夜平分点に誕生し、高山の麓に源泉を発し、山頂は常に霞で覆われていると述べた。

第 94 葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

3 か所の泉から小規模な流れが溢れ出て、そこから二本の流れとなり、その両流れの間隔は 40 パツソ(約 1.48m×40≒59m)で、500 パツソ(約 740m)流れた後、合流し、一つの川になるが、枯渇して無くなる可能性がある。第 3 番目の泉はもっと水量が豊富で、他のものから 10 マイル(約 16 km)離れている。河川は 1 万パツソ(約 15 km)流れて、他の泉のもう一つの泉に合流する。その後、ナイル川にその一部と他の一部の千に及ぶ河川が流れ込む。かくして、大河川が形成される。『その土地では、年に 3 か月にあたる 3 月、4 月、5 月を除いては、降雨がない、その降水量でこれらの河川は満たされ、結果、ナイル川は水でたっぷり満ちることになり、すべての原野を覆うのである。ナイルの水は、他の河川と合流する前、甘く、頗る美味しいのである。誰もしが沐浴したがるのである。皮癬や疥癬が治ると言われている。『ナイルの泉を越えて、15 日間の旅程で、果実がなるよい樹木が育つ地域で人口の多い土地に着き、そこには極めて美しい都市がたくさん存在している。これらの土地の向こう側は海があると言われているが、彼らはその海を決して見たことがないのである。『ナイル川が生まれる地域の近くに彼らが生まれた土地でタルタリアとよばれるのがこの都市である。周囲は 2 万 5 千パツソ(約 37km)あり、極めて多くの人々が暮らし、毎夜千人もの騎馬男子が町中徹夜し、水流を攪拌しては鎮めるのである。この地域は温暖で、果実がふんだんにあり、他のすべての地域に比べて、肥沃な土壌なのである。従って、年に 3 度草が生え、年に 2 度小麦が収穫される。パンとぶどう酒に恵まれ、ただ、エチオピアの大部分はワインで甘みを付けた水を混ぜた大麦を使用している。彼らは、存在しないアーモンドを除いて、イチジク、桃、林檎、オレンジ、我々のものに似たキュウリ(cohombro;cucumber)、レモンや、我々のものに相当する他のすべての果実を有している。彼らは、我々が知りもせず、聞いたこともない多くの樹木について話した。アラビア語でなければ、分からない通訳者の困難によって、私は、記録するために必要な語彙を造語することが出来なかった。しかし、唯一私が記録した木は、高さが成人男性の身長で、幹の太さは成人男性の両腕を回して届く長さである。

多くの外皮が何層にも重なり合い、果実はカシューナッツに似ているように見える。実を潰して、粉に挽いて凄く美味しい白パンを作り、それを招待客に振舞うのである。この木の扁平な葉身の長さは1コヴァード(0.66m)及び1指幅である。¶ ナイル川からメロエン島(Meroë)まで航行することはない。彼は、非常に険しい岩山の登り下りを繰り返すからである。メロエン島から先は航行可能である。しかしながら、河川が多く蛇行を繰り返し、

第94葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

そこを船舶が航行し、かくして6か月間、船旅になる。¶ ナイル川が誕生する地域で暮らす人々は、彼らにとって、太陽は北向きである。3月太陽は頭上にある。¶ エチオピア全土で筆記のための文字は、数文字以上存在しない。そこには多数の各州の大勢の人のために多くの言語がある。¶ インドに向かう海の近くの地域では、生姜、丁子(クローブ)、サトウキビが生育し、彼らの何人かは胡桃をノスカダ(nozcada)と言っている。¶ エチオピアとエジプトの間に砂漠が横たわり、陸路で50日を要する。砂漠を通過する者は駱駝に十分な食料と飲料水を積載している。この砂漠の多くの場所で、自身の駱駝に跨る裸身の野蛮人があちこちに跋扈している。彼らは牛乳と駱駝の肉のみを主食としている。かくして、駱駝で砂漠を移動する者に盗賊を働き、食料を強奪するのである。それ故に、彼らの多くは餓死する。これが、エチオピア人の僅かしか我々の土地に来ない原因である。¶ すべてのエチオピア人は我々より長寿で、等しく120歳を超えて生き、その多くが150歳に達し、幾つかの地域では、200歳を超える。¶ その土地は人口が非常に多く、人々で溢れ返っている。彼らは病気知らずで、ペスト罹患もない。それ故に、長寿年齢のために、人口爆発に繋がっている。地域の多様性によって、風俗習慣の同一性はない。¶ 彼らの衣服は亜麻か絹である。彼らには羊毛が不足しているからである。幾つかの地域では男女は地面を引き摺るような長ドレスを着用している。金・宝石で装飾され、幅が1パルム(22cm)ある帯で締める。ある女性たちは金刺繍された一枚の布で頭を覆う。他の女性たちは毛髪を四方に垂らし、また束ねる者もいる。¶ 彼らは金、宝石の豊富さにおいて我々より優位に立つ。¶ 男性は指輪を身に付け、女性は、宝石細工を施した、純金製ブレスレットを腕にはめている。¶ クリスマスから四旬節まで祝祭が開催され、毎日飲食と舞踊に明け暮れる。¶ 彼らは小テーブルの使用を常とし、2人か3人でしかテーブルを囲まない。テーブルクロスや食卓用ナプキン是我々のものと同様である。¶ 彼らは一人のみ国王を戴き、神に次ぐものとして、国王の中の国王と命名し、臣下に多勢の国王を従えると言われている。¶ 土地の雄牛は、駱駝同様に瘤があり、

第95葉：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

背後まで達する長さ3コヴァード(約2m)の複数の角を生やしている。かくして各角にワイン壺を吊り下げて運ぶのである。¶ 土地の犬は我々の土地の驢馬ほどの大きさで、かくして狩猟で、各一匹が1頭の獅子を制するのである。¶ そこには大量の巨象がいて、彼らはそれらを所有し、娯楽と歓喜のために飼育し、ある者たちは戦争に利用するために飼育する。狩

獵において、小象を捕えて、飼い馴らし、巨象を殺害する。幾頭かの巨象の歯は長さが6コヴァード(約4m)ある。『さらにその土地では、壮観さと歓喜のために、穏やかな獅子を飼育する。『そこにはベルス(Belus)と呼ばれる1頭の動物がいる。多彩色で、象に似ているが、象ほどの長い鼻はない。駱駝のような足をして、長さ1コヴァード(0.66m)の2本の角がある。各角の先は非常に鋭く、一本は前面に、もう一本は鼻の上にある。『ウサギよりも少し大きいもう一頭の動物がいるが、それに似た動物はなく、ゼベド(zebed)と呼ばれ、余りにもよい匂いなので、何度か次のようなことが生じる。その動物がある小さな木に近付き、その木にもたれかかると、余りに高貴で馥郁たる匂いが、その木のその場所に吸着し、その後、その匂いの辺りを通る者は、それを発見し、その動物がよりかかっていた断片を切り取って、その棒を持ち帰り、細かく切り刻み、金よりも高く売るのである。『彼らが言った。長さ9コヴァード(約6m)のもう1頭の動物がいる、と。身長は6コヴァード(約4m)、雄牛のように割れ目のある蹄があり、厚みが1コヴァード(0.66m)、毛髪はヒョウに似ている。頭は駱駝のようである。その首筋は周りが4コヴァード(約2.6m)、動物は非常にふさふさした尻尾を有し、尻尾の髪は貴重で、高額に値する。女性は両腕に、宝石をちりばめた尻尾を身に付けるのである。『もう1頭の動物は野生の食用、狩りで捕まえる。驢馬ほどの大きさと緑黄色の体に縞が走る。長さ3コヴァード(約2m)の角を有し、頭のとっぺんから足の先まで威勢がよい。『もう1頭の動物は赤色ウサギに似ている。小さな角があり、馬よりも高く跳ねる。『もう1頭は山羊に似て、角があり、後ろにまで届き、長さ2コヴァード(約1.3m)以上。彼らの臭気は熱を生ぜしめ、それ故に、その価格は40金貨を超える。

第95葉(裏面)：ニコラウ・ヴェネト旅行記：

『もう1頭はこの最後の角なしで、赤毛の動物に似ているが、首筋は長さ2コヴァード(約1.3m)ある。『あの土地で、もう1頭は大型駱駝、ヒョウ柄色で、首筋は伸びると長さ6コヴァード(約4m)に達し、頭部は山羊のようで特徴的であると言われている。『さらに曰く、高さ6コヴァード(約4m)の野鳥が棲息し、非常に繊細な脚を有し、アヒルの両足をしている。首筋と頭は小さく、雌鶏のような形の嘴をし、殆ど飛ばない。しかし、走行すると駱駝より速い。彼らが言った多くの他の事柄は、既に私は嫌気が差して、記録するのを止めた。かくして彼らが言うのは、砂漠のあの地に多くの蛇が棲息することである。棲息地に足のない、長さ50コヴァード(約33m)の蛇がいる。これがスコーピオン(さそり)星座の由来である。これらは一度に仔牛一頭を丸呑みして食べる。すべてはこの件につき、同意し、彼らが言ったのはかくの如しであった、と。かくして、彼らは私にはすべて善良なる人々であるように思われた。私は彼らをそのようなものと看做した。一切嘘をつく要因はなかった。かくして共通の生命力によって、他人の利益のために書くことは私にとって喜ばしいことであった。

『ニコラウ・ヴェネトの書は終わる。神への讃美を込めて、文書を執筆したのはボッジオ・フィオレンティンである。